HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宗教社会学における調査研究の課題と実践 発表資料
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	宗教社会学における調査研究の課題と実践―秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』（2004）、芳賀学・菊池裕生『仏のまなざし、読みかえられる自己』（2006）書評セッション―. 「宗教と社会」学会第15回学術大会. 平成19年6月10日. 東京都
Issue Date	2007-06-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35235
Type	conference presentation
File Information	sakurai-12.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評者　櫻井義秀

１　宗教社会学における構築主義的アプローチ

社会学では一般的に構築主義的発想や手法が隆盛をほこり、社会関係論、社会問題の社会学他、様々な研究領域に用いられている。現代宗教の社会学的研究において、近年、最も斬新でかつ完成度の高い研究成果をあげたのがこの二著であり、奇しくも真如苑を対象としている。小さい問いとして、なぜ、真如苑において構築主義的発想をもった研究者がそろって研究し得たのか、教団の特徴を考える上で非常に興味深い。想定されることは、真如苑において、言葉、語ることが他の教団より重視される傾向にあるのか（体験談や証しはどの教団でもやっているように思われるが)、或いは、研究者に長期間のフィールドワークを許容する開放的な文化があるのか。

2 著は 4 人の研究者によって書かれているのであるが、章ごとの分担執筆であるためにそれぞれが個性的な理論と分析方法を駆使している。

①川端の分析が真如苑の教団構造（霊能者の属性や位階上昇の過程分析）にも目を配りながらも、秋庭とともに霊能者の語りをコード化し、信仰的物語の構造をグラフ化する手順と成果を示してくれたことが両著者の最大の成果であろう。川端が開発した質的データの分析プログラムは社会調査法にとっても大変な貢献であるし、秋庭の宗教としてのクオリアを求める分析と記述の文体もまた独創的なものである。但し、筆者には十分に味わいきれなかった。

②菊池は物語論によりながら、回心を自己物語の書き換え過程と捉え、弁論大会で発表された自己物語のバージョンアップ（漸次的回心）を記述した。芳賀は弁士以外に物語の編集過程に加わる教化委員・同輩集団の相互作用を分析し、気づきのフィードバックを可能にする社会集団の特性を描き、弁論内容の時代的変遷が教団の組織的成長や社会背景にも影響されていることも説明している。

4 人は言語論的転回以降の構築主義的な信仰把握という点では一致している。しかし、同じ物語論といっても秋庭と菊池では随分と観点や記述の仕方が違うし、教団をマクロ的に見る川端とメゾレベルの分析を中心にする芳賀の組織の捉え方も異なる。相互補完的な研究としてみれば、秋庭・川端の著作が立教当時から教団が急成長を遂げた 1980 年代くらいまでの真如苑を霊能者の霊性開発を中心に分析しているのに対して、菊池・芳賀は 1990 年代以降の真如苑を青年信者教化行事である弁論大会から描いている。したがって、この 2 冊を読めば真如苑の教団形成から発展期の実像や、信者の信仰にリアルに迫るエスノグラフィーを得ることができる。両著とも社会学的研究として画期的なものであるが、評者としては 2 著の構築主義的アプローチの切れ味に敬意を表しながらも、回心研究となると切り捨てられてしまった部分の問題を感じている。その点を以下論じたい。

２　「回心」とは何だろうか?

2 著とも社会学的研究なので「霊能」「回心」という宗教学的概念をそのまま検証しようというような無謀なことはしない。それぞれ、霊能者による宗教的物語の構造を「霊能」の信仰的次元、弁士による体験談の構築のされ方を「回心」の過程と操作的に定義した上で、聞き取りや参与観察により収集可能なデータのテキストの分析に集中するのである。

それぞれの分析に異存はない。しかし、物語の構造や構造化の過程に関わる知見を真如苑における「霊能」や「回心」の特徴として一般化するとなると、そこで問題が生じる。

物語や信者集団の相互作用において自己・他者・世界の認識がまさに教団から提示される諸概念により形作られる局面が実にうまく描かれているが、ここに典型的な教団による教化プロセスを見ることも十分可能である。しかも、この教化がスムーズに進んだ信者（霊能者や弁士）の事例を扱うことによって、教団による教化と信者の自発的な信心が齟齬を来すような局面が出てこなかった。多少図式的にはなるが、個人を生かすような教化がうまくいかなかった場合、おそらくこの信者は教団の回心を生み出す教化方法に疑問を持つだろう。極端なケースでは、真如苑批判サイトに書き込まれる「マインド・コントロール」被害というクレイムになる。構築主義的に考えれば、「回心」と「マインド・コントロール」はどちらも自己物語としては等価なのであり、利害関係者としての教団、批判側との関係の中でより強化されるストーリーでしかない。

この点については、完成版の物語を扱った秋庭・川端よりも、構築局面を問題にした菊池・芳賀の方が自覚的であったように思われる。回心に働くソフトな権力作用があることを認めている。しかし、評者としては、教説として語られ、内面化されたコトバが当人において宗教的力とリアリティを持つコトバに変わる局面の状況が非常に気になる。コトバがイデオロギーと化す場面といってもよい。ソフトな権力作用が、ハードな権力作用に変えられる局面の問題である。このような事例は少なくとも弁論大会ではなかった。

評者のようにカルト問題を研究の対象にし、現役信者よりは脱会信者の聞き取りを中心に調査を進めるものにとっては、どうしてもこだわってしまうところなのである。2 著とも、真如苑に関して信仰を倫理的な次元、気づきの信仰的・教育的次元についてのみ語っている。評者はそれをもって 2 著とも真如苑の信仰をまさに宗教として評価しているのだろうと考え、それぞれの研究を通して掴んだ真如苑の宗教としてのリアリティを評価してもらえないだろうかと書評セッションの席上で頼んだ。秋庭がいうところの「質感」である。

残念ながら、評者の質問に著者達はストレートな回答をくれずに、フロアから真如苑の開祖に関わる質的評価を聞くことになった（西山茂氏）。実のところ、このような発言の方が、調査の限りにおいてのみ知見を語り、それ以外は禁欲するという態度よりも社会的には大きな意味を持つこともある。この点を最後に述べておこう。

３　宗教研究者に求められる社会的役割

一般市民が専門家に求める見解と、専門的研究者がなす知見の公表の仕方には相違があるし、学術的にはあって当然である。理想的にいえば、専門家の学術論文を一般の人の視

点で分かりやすく解説するサイエンス・ライターのような職種や働きが宗教研究でもあったよいと思われるが、現実にはそういう人があまり見あたらない。そういうこともあってか、宗教に関する本は教説に徹底するか、俗受けをねらうか、個人の思想を展開するかといったものでバランスのとれたものが少ない。しかし、売れる。そうしたなかで学術的訓練を受け、職業としての研究が専門家集団の批評にさらされる研究者が、本来は極めて難しい宗教の社会的評価を行うということには意味があるのではないか。

研究者であれば、研究対象（一枚岩ではない教団構成員）と利害関係者（教団或いは批判団体等)、及びマスメディア等により社会的に構築される特定宗教に関して一義的な評価や質感を簡単に述べることができないことは十分に承知している。しかし、だからといって構築主義的社会研究にありがちな競合する複数のリアリティを描きわけ、そのポリフォニー（多声的）的性質こそが大事なのだと述べて、以上研究終了とはならない。その先に研究者としての社会的実践がある。これは個人的な所感や言説を各所で述べるようなことではなく、専門的な研究を通して人間や社会のあり方について踏み込んだ評価を行うということであろう。

最後になるが、2 著のように社会学的に理論・研究法両面においてレベルの高い学術書を仕上げるためには、相当の研究能力と長期にわたる調査分析作業が必要になる。これだけの宗教社会学的研究が出されると、中途半端な調査研究は今後やれないことは見えており、新宗教研究者が減ることも同時に予想される。4 人の著者にはその分も頑張ってもらわなくてはならないだろう。まだまだ、みなさん能力・気力共に余裕ありと評者は見ているので、より踏み込んだ研究を新宗教運動の諸領域に期待してやまない。